

# 探訪 北の風景 30

## 終着駅 増毛 留萌管内・増毛町

青木和弘

駅は別れと旅立ちの場所。向かうレールの先何が待ち受けるのかは誰にも分からない。JR留萌本線の終着、増毛（ましけ）駅。高倉健が主演した映画「駅 STATION」（81年公開・東宝）のロケ地としても知られる。

9月の3連休初日の土曜日とあって、12時47分と14時51分、増毛駅に到着した列車は、廃線前に乗ろうと訪れた鉄道マニアや観光客であふれていた。通称「増毛線」と呼ばれる留萌・増毛間（16・7キロメートル）には、礼受（れうけ）、舎熊（しゃくま）、増毛の3駅があるが、運行は2016年12月4日で終わる。

昼間、にぎわいをみせた増毛駅も、夕方17時39分着の降客はまばらだった。増毛港がすぐ側にある、海が近い。カモメやカラスの鳴き声が聞こえ、虫の音も混ざる。増毛駅のホームは一つで、線路は単線の行き止まり。かつての貨物ヤードや転車台跡には草が伸び、一部が駐車場になっている。虫の音はそこからやってくる。

廃線間近の終着駅に立つと、いたたまれない気持ちになる。北海道にはニシン、石炭、木材の供給を使命に負った開拓の歴史がある。ニシンは食料であるとともに、ニシン粕（かす）がミカンや菜種、綿花など商品作物の栽培に不可欠な窒素肥料になった。石炭は製鉄など重工業に欠かせないエネルギー源で、木材は建設や製紙にはなくてはならない資源だ。その輸送を担ったのが鉄道である。だから、北海道の鉄道には、開通が古ければ古いほど、栄華の記憶が人々の心に深く刻み込まれている。

留萌本線の深川・留萌間の開業は1910年（明治43年）。留萌・増毛間は11年遅れて大正10年だ。ニシン漁で栄え、ニシン粕や木箱に詰めたニシンを貨車で積み出した。

増毛町は人口4583人（2016年8月末現在）。留萌管内最南端の町で、かつては支庁所在地だった。町名は、ニシンが来ると海一面にカモメが飛ぶことから、アイヌ語で「カモメの多いと

増毛駅舎の中では、孝子屋くるめ食品が土産物や軽食を販売している



ころ」という意味の「マシユキニ」または「マシユケ」が転じたといわれる。

江戸時代から約200年続いたニシン漁は1954年（昭和29年）から漁獲量が急減。4年後に終わってしまった。しかし、幕末期から昭和20年代までは栄華を極め、

その名残は今も、町のそこかしこに重厚な石造りの倉庫群や古い木造建築物として残っている。

ニシン漁の衰退後は、カレイやタコ、スケトウダラなどへ転換を図るが、稼ぎ頭のスケットウダラが漁獲高や魚価の変動で衰退。現在は、栽培漁業が成果を上げ、「えび」「タコ」「ホタテ」が増毛の水産業を支える。

増毛は味覚の宝庫だ。日本一の漁獲量を誇るポタンエビや、甘エビ、タコ、カレイなどは年中水揚げされ、春はマス、夏はウニ、秋にはサケ、冬はアワビ、タラ、カジカ、ハタハタ、ハツカクなど、旬の味覚のオンパレードだ。

果樹栽培は日本の北限とされ、初夏はサクランボとイチゴ。秋にはリンゴやブルーベリー、ブドウ、





増毛駅に、観光客や鉄道マニアがたくさん降り立った。留萌・増毛間の1列車当たりの平均乗車人数の推移を見ると、JR発足時の87年が「約37人」だったが、28年後の2014年は、何と「約3人」にまで減っていた



増毛駅の向かいに、高倉健や倍賞千恵子らが出演した映画「駅 STATION」のロケで登場した「風待食堂」の看板がそのままの観光案内所がある。ロケにちなんだ展示や、土産品も販売している

洋ナシなどが採れ、果物狩りができる観光農園も盛んだ。

もう一つ、日本最北の造り酒屋「國稀酒造」も見逃せない。施設の見学や試飲もでき、施設はさながら博物館のようだ。

こうした、新鮮な食材を使ったレストランが「オーベルジュましけ」で、宿泊もできる。ここは増毛町出身のフランス料理家、三國清三さん（東京・「オテル・ドウ・ミクニ」経営）が監修するフランス料理が味わえる。

このほか、「寿司のまつくら」は、海の幸をふんだんに盛った「特上生ちらし」が有名。和菓子の「中村屋製菓」は「中花まんじゅう」で知られる。パンやアップルパイ、ラーメンやタコザンギなど、ご当地グルメも数え上げればきりが無い。ぶらり旅にもってこいの町である。